

『おろしや国酔夢譚』における異文化体験：付 『天平の藁』

青山，太郎
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5428>

出版情報：言語文化論究. 15, pp.69-77, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



『おろしや国酔夢譚』における異文化体験

(付. 『天平の躰』)

青山 太郎

1.

井上靖の『おろしや国酔夢譚』(1968年)に描かれた異文化体験について、考えてみたいと思います。この小説で登場人物たちの異文化体験がどのように描かれているか、ということです。そのような観点からこの小説を見る時、重要な箇所が二つあると思います。ひとつは、漂流民の一行がイルクーツクで、以前の漂流民の子供である混血児たちに会うところ、もうひとつは、小説の末尾で、帰国した光太夫と磯吉が救い難い違和感に苛まれるところです。

先ず第一の場面ですが、日本を出るとき17人だった乗組員は、イルクーツクに着いた時既に6人になっていましたが、その6人の日本人のところを、或日片言の日本語を話す二人のロシア人が訪ねて来る。ひとりには漂流日本人久太郎の子トラペズニコフ、もうひとりとは同じく漂流日本人三之助の子ターリノフであると自己紹介する。つまりこの二人は、日本の漂流民とロシア女性の間生まれた子供で、二人とも顔付、髪の色、目の色等から言えば全くのロシア人です。この時ほど光太夫が驚いたことはなかった。

「二人の奇妙な人物は、片言の日本語で自分たちが日本人を父として生れた人間であるということだけを伝えて、それで満足して、最初の訪問を打ちきって帰って行ったが、光太夫たちが受けた打撃は大きかった。訪問者たちと相対している時は、思いがけず日本語を多少でも解する人物が現れたということで、ただわけもなく興奮していたが、彼等が帰って行くと、ひとしく日本人の漂流民たちみなを、言い知れぬ悪寒が走った。

奇妙な訪問者たちと一番多く言葉を交したのは小市であったが、その小市がふいに、『おい、誰か、塩をまけや』と言った。(……)

日本の漂流民たちは、日本人と異国人間に生れた混血児というものを見たのは初めてであった。彼等と相対している間は、何とかして意志を通じさせようということに夢中になっていたが、彼等が居なくなると、不気味な、見るべからざるものを眼にしたあとの不快感が残った。当分拭うことのできそうもない、何とも言えぬ厭な思いであった」

(pp. 137-138 文春文庫版 以下同)

光太夫の反応は一同のそれとは多少異なったもので、彼は「自分たちの運命が、先き廻りをして、自分たちの前に不気味な姿を現わして来たような気がした」(p. 139) のでした。二人の訪問者の父親である久太郎と三之助という漂流日本人が、この国にいたことは確かです。ことによると、もっと多くの漂流日本人がいたのかもしれない。彼らは一体どうい

う運命を辿ったのか。彼らが日本へ帰ってきたという噂は、絶えて耳にしたことがない。ということは、彼らが皆日本へ帰ることなく、ここ異国で一生を終えたということです。光太夫は「得体の知れぬ黒い大きなものが、自分の前に立ちはだかった思いであった」。

これは漂流民としては至って理詰めの反応であると言えます。光太夫は仲間の内で指導的立場にあるところから、常に仲間全員の身の上を考えることに慣れており、また、仲間の内ではいちばん理詰めに物事を考える人間でした。

それに対し、二人の訪問者が帰ったあと「日本の漂流民たちみなを、言い知れぬ悪寒が走った」という仲間の者たち一同の反応には、理詰めと言わんよりむしろ感覚的なものがあって、それゆえここには一層深いものが露呈している。少くとも作者はそのように描いていると思います。

二人の訪問者が帰ったあと、漂流民らには「不気味な、見るべからざるものを眼にしたあとの不快感」、「何とも言えぬ厭な思い」が残った、と言われている。この「不快感」「厭な思い」とは何なのか。わたしは、彼らが「混血児」たちの内に感じ取ったものとは、日本人としてのアイデンティティーの喪失であったと思います。言い換えれば、彼らはこの時初めて異文化というものに直面したのです。

これまで7年間、彼らは異国に生きてきました。異国では日本とは風土が違うのですから、衣食住をはじめ風俗習慣が違うのは当然であり、漂流民たちはそのことに確かに戸惑いはしたものの、「悪寒」や「不快感」を感じはしなかった。だいいち彼らには、そんなものを感じている暇はなかった。なにしろ日本とはお話にならぬほど苛酷な風土の中で生き残るために、日々戦わねばならなかったからです。その際彼らが相手取ったものは、寒さであり、飢えであり、壊血病であり、凍傷だったのであって、彼らは別段異文化と戦っていたわけではなかった。

あるいは、異国の風土や風習も異文化の一部であるという言い方をするなら、彼らは異文化と戦っていたと言えるでしょう。ただその場合は、異文化という言葉の内に二通りの意味を区別したいと思います。言い換えれば、『おろしや国酔夢譚』という小説の内には、二種類の異文化体験が描かれていると思うのです。異国の風土や生活習慣といった異文化体験は、この小説のいたるところに遍在しています。しかし、風俗習慣がいかにも異なろうと、さらに言葉や人種がいかにも異なろうと、いたるところ人情にさしたる違いはないということも事実であって、人は風俗習慣の違いを、人情を梃子にして乗り越えてゆくことができる。つまり、他国の風習や言語は、これを学習することで我物としてゆくことができる。さらに、飢えや寒さに脅かされるおそれがなくなれば、これを好奇心をもって眺め、観察したところを記録する余裕もできます。現に光太夫は、漂着の非常に早い時期からメモをとることを始めたらしい。これは彼の強靱な精神を証するものです。このメモないし日記はだんだん詳しいものとなってゆき、イルクーツク時代には地誌的な異文化研究と言える性格を帯びるに至ったことが、『北槎聞略』から窺えます。

しかしこの小説には、第二の、遙に深刻な異文化体験が描かれている。ほかでもない、イルクーツクで漂流民たちが、二人の混血児の訪問を受けて感じたところのものです。この場合異文化は、こちらを押しつぶし呑み込んでしまう威嚇的な何ものかです。第一の異文化が、この意味で漂流民たちを脅かすことはなかった。漂流民たちはこの異文化に、自らの内なる無意識の日本文化を対置させ、これと対等に接することができた。それに反し

第二の異文化は、漂流民たちを呑み込んで無と化せしめる何かしら圧倒的な力として立現れてくる。彼らはこれにどう対処してよいのかわからない。それまで異文化は彼らに「しっかりしろ。しっかりしないと命はないぞ」と語りかけていた。この時から異文化は彼らに「しっかりしろ。しっかりしないと日本人ではなくなるぞ」と語りかけるようになったのです。漂流民たちはこのことを肌で感じ取った。彼らがこの時初めて異文化に直面したというのは、こういう意味です。異文化に接し、異文化に呑み込まれてしまう人間のタイプは、『天平の薨』にも出てきます。

実は、漂流民の一行の内に、二人の混血児に会う以前から、この恐るべき異文化に直面していた人物がいます。凍傷にかかり、片脚を切断せねばならなくなった庄蔵です。彼はこの時から、自分がロシアに留まる運命であることを悟っていたかに見えます。片脚を失ったくらいで帰国の望みを捨ててしまうというのは、少し女々しすぎるように思えますが、光太夫の見るところ、以前から一行の内ではいちばん郷土に執着せず、帰りたいような顔をせず、新たな土地への移動そのものを楽しんでいるかに見えるのが庄蔵だったのであり、このことが伏線になっているのかもしれない。片脚を失ってから彼は教会へ通うようになり、やがて脚の予後が悪く入院せねばならなくなったことがきっかけで、ロシア正教に改宗し、ロシアに帰化し、フョードル・シトニコフというロシア名を得ることになります。

むしろ、やはりロシアに残ることとなるもう一人の人物、新蔵のほうが、そうした女々しさとは無縁で、好感がもてます。この新蔵という男は、頭の回転が速く要領がいいが、欠点は女好きなことで、アムチトカ島にいた時から島民の娘に手を出しかけたり、カムチャツカでもカムチャダールの娘の尻を追いかけたりしており、イルクーツクではニーナという若い後家といい仲になっています。この新蔵が大病に罹り、医者にもうよくならないと言われる。一生癒らないならロシアで暮らすことになる。どうせロシアで暮らすのなら、庄蔵のようにロシア正教の洗礼を受けてロシアに帰化しよう、というわけで洗礼を受けたところが、途端に病気は癒ってしまった。これは早まったと悔んだがもう遅く、結局庄蔵と共にイルクーツクで日本語学校の教師になる腹をきめます。彼は性格的に幾分軽率なところがあり、光太夫も以前からこのことを危ぶんでいたのですが、やはりこれが彼の命取りになったわけです。

以上、この小説に描かれた異文化には二種類あるということを言いましたが、これを人間の側から言うと、異文化と接触する人間には、これに呑み込まれてしまう人間と、これを観察する人間という二種類がある、と言えるでしょう。庄蔵や新蔵は前者の例であり、光太夫は後者の例です。

光太夫には、何がなんでも日本へ帰るんだという不拔の目的意識がある。彼がこれを疑ったことは一度もありません。苛酷な風土のなかで、漂流民の誰彼が、おれはもうここに留まってもいいといった弱音を吐く時、光太夫は、そんなことでどうする、生きて伊勢の土を踏むという望みを決して捨ててはならないと言って、仲間を励ましてきました。そしてこれは、一行の統率者としての使命感に発するだけの言葉ではなくて、真実彼の信念だったのです。この信念は、異国における異文化との接触が深まれば深まるほど、彼の中でますます確固たるものとなってゆきました。

彼はアムチトカ島に漂着した時から日記をつけ始め、また異人の言葉（ロシア語）の習得に努めます。とりわけイルクーツクに着いてからは、一日も早くロシア語の書物を読め

ようになりたいと、二人の混血児についてロシア語の勉強に身を入れるようになる。

「若し自分もこの地で死ぬ運命であるなら、自分の死ぬ場所がどんな国で、どんな人間が住んでいるかを知って死にたい気持ちだった。併し、反面、ひとたびその覚悟ができてしまうと、光太夫の帰国に対する願いはますます固いものになって行った。自分たちが見聞きしたものを、あまさず故国の人たちに伝えたいと思った。そして夜床へ入ると、ここで挫けてはならぬ、ここが正念場だと、そんなことを光太夫は自分に言いきかせた」(p. 197)

ところが光太夫は、自分がなぜこれほどまでに日本へ帰りたがるのかときかされると、自分でもよく分らないのです。のちに日本へ帰って、幕府の役人から、ロシアでそれほどの厚遇を受け帰化を勧められたのに、なぜ帰ってきたかときかれ、故国には老母妻子兄弟がいるのでと答えましたが、これがその場の方便にすぎなかったことは、光太夫自身がよく承知していました。漂流当時、老母は既に病いで死の床に就いていましたし、また自分は養子ですので、遭難が確実となれば妻は別に養子を迎えるか、子を連れて他家に嫁ぐかしている筈でした。光太夫はアムチトカ島に漂着した時から、「老母のことや、妻子のことに思いを馳せることを固く自分に禁じ、そして実際に放浪の十年間をそのようにして送ってきた」(p. 356) のです。

つまり光太夫には、なぜかよく分らないが故国へ帰らねばならぬという確たる信念があるのであって、それゆえ彼が異国に呑み込まれてしまうことは決してないのです。このような人間にとって、異文化はあくまでも観察の対象でしかありえない。異文化はこの種の人間の傍を素通りしてゆく。

2.

井上靖に、八世紀の遣唐使を描いた『天平の薨』(1957年)という作品があります。ここにも、異文化に呑み込まれてしまう人間と、呑み込まれない人間という、異文化体験の二つの型が描かれていると思うので、寄道になりますが紹介しておきます。

第九次遣唐使の一行が四隻の船に分乗して難波津を出港したのは、聖武天皇の天平5年(西暦733年)4月のことです。造船技術も航海術もすこぶる未熟な時代で、四隻の船は三ヵ月以上も海上を漂ったのち、8月に蘇州へ漂着し、一行は翌天平6年、つまり玄宗帝の開元22年、陸路洛陽へ入ります。当時唐の朝廷は、西都長安ではなく、東都洛陽にあったのです。

この時の遣唐使には、普照、^{ようえい}榮叡、玄朗、戒融という四人の留学僧が含まれていました。彼らは日本政府により選ばれて、先進国唐の文化(何よりも先ず仏教)を学ぶべく派遣されており、それゆえ初めからそれなりの覚悟をもって異国へやって来たわけで、その点、18世紀末にロシアへ流れ着いた漂流民たちとは、異文化との接触の仕方がまるで違います。漂流民たちは否応なく望みもしない異文化の中へ放り込まれたわけですが、留学僧たちは自ら進んで、異文化を摂取するためにやってきたのです。彼らは唐の文化に憧れ、この文化についてのかかなりの予備知識も持っており、この異国は彼らにとって決して未知の文化圏ではありません。そうした違いはあるものの、やはりここにも、異文化に呑み込まれる

人間と、呑み込まれない人間が登場します。

四人の留学僧のうち普照と栄叡の二人は、日本を出るときから、日本に戒律を施行するための適当な師を唐から招請するという任務を、政府から課されていました。結局、鑑真和上という高僧が日本への渡来を承諾し、唐の年号で天宝2年（西暦743年、日本年号天平15年）、次の遣唐使の到来を待たずに揚州を発ちますが、東支那海へ出たとたん嵐に遭い、近くの島に漂着してしまいます。次いで天宝7年(748年、天平20年)にも日本への渡航が試みられますが、この時も順風を得ることができず、船は南支那海の海南島に漂着します。陸路揚州へ戻る途中で、栄叡は病没、鑑真和上も視力を失うという艱難を嘗めます。鑑真はそれでも渡日の意志を捨てず、結局、天宝12年(753年、天平勝宝5年)、第十次遣唐使の帰国に便乗することで、日本への渡航を果すこととなります。

『おろしや国酔夢譚』の主人公は大黒屋光太夫であり、物語は光太夫の視点を通して描かれます。『天平の薨』の主人公は留学僧普照で、物語は普照の目を通して描かれており、この点で二作品の構造は非常によく似ています。どちらの主人公も、異国にあってひたすらひとつの目的に向かって邁進する。光太夫は是が非でも日本へ帰らねばならず、普照は是が非でも鑑真を日本へ招聘せねばならない。そのための彼らの悪戦苦闘がそれぞれの物語を構成します。彼らはいづれも異文化の内に身を置いています。この異文化には一歩距離を置いて対している。自らに課した目的が、この異文化の中に入ってゆきここに埋没することを許さないのです。

興味深いのは、むしろ異文化に呑み込まれてしまう人物たちで、その呑み込まれ方も色々です。玄朗という留学僧は、入唐して一ヵ月後には早くもホームシックに罹って、日本へ帰りたと言います。彼はやがて僧籍を去り、唐人の女性との間に二人の子供をもうけ、日本に帰ることを諦めて、唐に留まることとなります。

四人の留学僧の内の残りのひとり、戒融という人物も、やはり異文化に呑み込まれた人物と言えるでしょう。彼は入唐早々から、「経典の語義の一つ一つに引懸っている日本の坊主たちが、俺には莫迦に見えて来た」(p. 29 新潮文庫版 以下同)とか、「俺はいつか、この唐土での生活に慣れたら自分の足でこの広大な土地を歩けるだけ歩いてみるつもりだ。僧衣をまとい、布施を受けながら、歩けるだけ歩くつもりだ」(p. 29)と広言していました。そして事実、一年も経たぬうちに、戒融は官費留学僧としての地位を捨て、一介の托鉢僧となって放浪の旅に出ます。

八年ばかりのち、普照は天台山の近くで、托鉢姿の戒融に再会します。戒融はこの時まで、唐の全土を跋渉していました。彼は普照に向い、「もう俺は、日本へ帰る気は持っていないよ」と言います。「俺は両親もないし、兄妹もない。何のために日本に帰らなければならぬのだ。日本に生れたというただそれだけの理由で日本へ帰らなければならぬのか。日本人の血を持っているから日本へ帰らなければならぬのか」(pp. 90-91)。日本へ帰りたと思っている普照は、これに何とも答えることができない。

普照が最後に戒融と会ったのは、これよりさらに十年ほど後、天宝7年、海南島から陸路北へ帰る途中立寄った広州でのことでした。普照は、戒融が止宿している婆羅門の寺を訪れる。二人は久澗を叙し、異国の船が群れ集う港の異国の飲屋で、異国の酒を飲みます。戒融は、鑑真や普照たちがこの地へ来ていることは、噂で聞いて知っていたと言う。それならなぜ訪ねて来なかったかと普照が詰ると、戒融は、「だんだん日本人に会うのが厭に

なる。故国の土を再び踏むまいと決心した者には、故国の匂いを持っているものはなべて厭なものだ」(p.124)と言います。この時戒融は、近く海路天竺へ渡るつもりであること、帰途は玄奘三蔵の『大唐西域記』の道をとって唐土へ帰るつもりであることを、普照に告げます。戒融のその後の消息は不明です。彼は日本へは帰らないと言っていましたが、或る記録によると、彼が天竺から帰ったのち、渤海国経由で日本へ向った形跡があると言う。やはり日本へ帰ってきたのかもしれませんが。

『天平の蠶』にはもうひとり注目すべき人物がいます。普照たちより二十年以上前に入唐した業行という僧です。彼は入唐後ほどなく自分の学才に見切りをつけ、それよりいま日本でいちばん必要なのは、一字の間違ひもなく写された経典や経疏であると考え、以後方々の寺を渡り歩いては、そこに蔵された経を写すことに専念している。彼は「二十何年か唐にいながら、知っているところといえばこれら幾つかの寺しかない。どこも見もしなければ、誰にも会っていない」(p.41)。

業行は、多年の間に写し溜めた膨大な量の写経を携えて、鑑真や普照らと共に、第十次遣唐使の帰国便に便乗して日本へ向いますが、四隻の船のうち業行の乗った船は運悪く遭難し、彼が生涯を費した写経の堆は、彼自身と共に海の藻屑と消え去ります。

この業行という人物に実在のモデルがいたのかどうか、分りません。作者の創作かもしれません。それにしても、彼は異文化に呑み込まれた人間なののでしょうか、それとも呑み込まれなかった人間なののでしょうか。彼は文化的先進国である唐にいながら、この異文化を識ろうなぞという気を毫も起さなかった。僧房に籠って写経ばかりしていた。彼の念頭には経典を書き写すことと、この書き写した経典を日本へ運ぶこと以外、何もなかった。異国の地にありながら、彼にとって異国や異文化なぞ存在しないも同然でした。こう考えてくると、彼は異文化に呑み込まれない人間であったように思えます。ところが見方を変えれば、彼が写していた経典とは、これは異文化の最たるものであって、彼はこの異文化を日本へ移植することに生涯を賭けたのでした。そう考えると、これもまた異文化に呑み込まれた人物であると言えます。「写経」を「翻訳」で置き換えれば、こんにちの大部分の外国文学者の身の上にそのまま当てはまるところが、この話の味噌です。

3.

『おろしや国酔夢譚』のもうひとつ重要な箇所は、末尾にあると思います。つまり、光太夫、小市、磯吉の三人がロシアから帰還して蝦夷地に着いたところから、この小説のおそらくはいちばん重要なドラマが始まる。これまでの章は、このドラマのための伏線にすぎなかったとすら見える。漂流民の一行も、十年前伊勢の港を出た時は17人だったのが今は3人になっており、このうち小市は根室に上陸後早々壊血病で倒れ、結局無事日本へ帰還したのは光太夫と磯吉の二人だけということになりますが、彼らは念願叶って日本へ帰国し、これで物語はめでたしめでたしかというところではなく、最後にとんだどんでん返しが控えているのです。日本へ帰ってきた途端、彼らは自分たちの置かれた奇妙な立場に気付かざるをえなかった。

アダム・ラクスマンが根室に上陸したのは、寛政5年(1793年)十月初めのことです。ラクスマンはここでの越冬を松前藩に願い出て、許可されます。

厳しい出入国管理令を敷いていた当時の日本では、外国との交渉ないし交易はすべて長崎港のみで行うことになっており、北辺の蝦夷地にロシア船が来たからといって、おいそれと交渉に入れる状況にはありませんでした。ロシア使節の蝦夷地への来訪は、日本政府にとって、招かれざる客以外の何ものでもなかったのです。これは、突然厄介なものが自分勝手に飛び込んで来たということで、「そしてこの厄介なものは二人の漂民を母国に送還するという名目のもとにやって来たのである。こう考えて来ると、光太夫は自分や磯吉が母国に対して受け持っている役割が、幕府にとって甚だ好ましからざるものであることに思い当らざるをえなかった」。

寛政5年6月21日、アダム・ラクスマンと幕吏との間に正式の会見が行われ、幕府側はロシア使節に対し、長崎以外の場所で異国からの公文書を受取ることはできないとして、シベリア総督名義の国書の受取りを断り、通商・交易の交渉は一切これを拒否したものの、漂民を送り届けてくれたことに対しては米百俵を贈り、使節を厚く歓待する等、それなりの礼は尽くしています。もっとも、ロシア船乗組員の函館への上陸は許されませんでした。幕府としては、国是に鑑み、これ以外の対応の仕方はなかったのでしょうか。

この会見の後、光太夫と磯吉の身柄は正式にロシア側から日本側へと引渡されます。しかし、自分たちが「とんでもないところへ帰ってきた」という思いは、光太夫たちを去らない。

「氷雪のアムチトカ島よりも、ニジネカムチャツクよりも、オホーツクよりも、もっと生きにくいところへ自分は帰ってきたと思った。帰るべからざるどころへ不覚にも帰ってしまったのである。この星の輝きも、この夜空の色も、〈……〉もう自分のものではない。自分は自分を決して理解しないものにいま囲まれている。そんな気持ちだった。自分はこの国に生きるためには決して見てはならないものを見て来てしまったのである。〈……〉光太夫は絶え入りそうな孤独な思いを持って、四人の役人のあとに従い、どこへともなく歩いて行ったのであった。どこへ連れて行かれようが、もう決して自分が理解されぬであろうということだけが確かであった」(pp. 340-341)。

光太夫は自分が恐るべき孤独の内にあることを悟るわけですが、この孤独はなにゆえでしょう。

光太夫には、万事につけ日本よりもロシアのほうが優れているように思えて仕方がない。漂民二人を含むロシア使節の一行が陸路函館から松前へ入る時、松前藩の行列がこれを先導しますが、この行列の形式張った物々しさに、光太夫はあつけにとられる。儀礼や形式はもちろんロシアにもありました。しかしこれほど空虚な儀礼や形式は、あそこにはなかったように思える。

「光太夫には一切が余りにも形式的で空々しく思えた。露都ペテルブルグの賑わいを見て来た眼にはすべてがひどく貧しく空疎に見えた。道路も見すばらしかったし、風景も小さく、人間もまた同じであった。〈……〉しかもこの間に経験したことは、簡単に運べそうな事柄がひどく固苦しく窮屈な手順を必要とした。何事も簡単には行かなかった。確かに母国であったが、不思議な国に来た思いであった」(p. 332)。

日本はおそろしく窮屈です。十年ぶりで日本へ帰って来ていながら、国の人々と碌に話もできない。エカチェリーナ号の乗組員たちは、見物のための上陸すら許されなかった。いっぽうロシアでは、たとえ外国人であれ何処へ行こうと自由で、監視なぞ一切付いてはなかった。ひいては、ロシアでは何処へ行こうと自由であると言い立てることすら、ここ日本では控えねばならない始末です。

光太夫は、十年間、帰国のみを念じつつ放浪生活を送ってきました。日本へ帰らねばならという気持ちには、いささかの揺ぎもなかった。彼が異国の珍しい事柄を克明に記していたのも、ひとえに、いつの日か自分が日本へ帰れると想定してのことでした。日記のかたちで観察記録を書き綴ることにより、彼は自らの内で帰国の意志を確認し続けていたとも言えます。珍しい事物や新たな体験を書きとめることと、帰国を志すことは、彼の内で同じひとつのことだったのです。

「俺は自分の国の人間が見ないものをたんと見たんで、それを持って国へ帰りたかったんだ。あんまり珍しいものを見てしまったんで、それで帰らずには居られなくなったんだな。見れば見るほど国へ帰りたくなったんだな。(……)」

だが、今になって思うことだが、俺たちの見たものは俺たちのもので、他の誰のものにもなりはしない。それどころか、自分の見てきたものを匿さなければならぬ始末だ」(p. 357)。

見て来たものを匿さなければならぬというのは、当時の日本の外交政策がしからしめたところでしょうが、「俺たちのみたものは俺たちのもので、他の誰のものにもなりはしない」というのは、当時の社会的・政治的事情とは関係なく、異文化体験の本質を衝いた言葉であると思います。彼らが自らの体験を誰にも伝ええないというのは、この体験が本物であった証拠です。彼らはこの体験によって変ってしまった。異文化は光太夫や磯吉の中を素通りして行かなかった。彼らは一意専心帰国をめざし、異文化に呑み込まれることなく日本へ帰って来たのでした。「何でも見てやろう。しかし決して呑み込まれないぞ」というのが彼らの心構えでした。しかし、当然といえば当然ですが、異国はやはり彼らを変えてしまったのです。彼らは日本へ帰るまではそのことに気づかない。日本へ帰って初めて、自分が変ってしまったことに気づく。ところが、この自分が変ってしまったという事実を、どうにも周囲に伝える術がない。これは、変ってしまった自分というものが、伝達可能な知識や情報ではないからです。それは知識や情報よりもっと深いところにある。作者はここでこの種の異文化体験を描こうと意図したのであり、そしてそれは見事に成功していると思います。

異文化には二種類ある。ひとつは、知識・情報としての異文化であり、これは伝達可能です。例えば、光太夫がロシア滞在中に書きとめ、帰国後桂川甫周に物語り、甫周が『北槎聞略』として定着させたものがそれです。もうひとつは、既に漂流民たちの体内へ入り血肉と化することで、彼らを変えてしまった異文化です。これは既に彼らの人格や個性と一体化してしまっているがゆえに、伝達不可能です。それゆえ、逆説的な言い方ですが、これはもう異文化とは言えない。既に個人のものとなったなにかです。

学問は、知識としての異文化しか扱えない。『おろしや国酔夢譚』の末尾近く、光太夫

が蘭学者たちの正月の宴に招かれるところがあります。この席でも、光太夫は救い難く孤独なまま、かつてトボリスクで見た貴族出身の流刑囚ラジーシチェフのことを思い浮かべる。人間個性に関わる異文化体験のさまを捉えることは、文学だけがなしうる仕事です。

(平成13年度言文公開講座「異文化の受容 — 翻訳を中心として」での話)